法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-09

五感他の精神生理的機能を連想させる英語動詞群の意味分析

ITO, Koichi / 伊藤, 幸一

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
89
(開始ページ / Start Page)
47
(終了ページ / End Page)
59
(発行年 / Year)
1994-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005452

Hosei University Repository

五感他の精神生理的機能を連想させる英語動詞群の意味分析

伊　藤　幸　一

はじめに

人間は外界の刺激を五官を通して，五感として知覚する。感受された刺激に対応して，内的世界には，感情とか，思考とか，が存在する。それらの内的精神活動は，言語行動として，あるいは肉体行動として，五体を通して，外的に吐露される。

この簡略化された図式でも，外のものを内に入れ，内なるものを外に出すという，具体的因果関係は別にしても，対立関係は見て取れる。それぞれ，意識をもっても展開するが，本稿では，意識をもたずに，反射的に展開する側面に焦点を合わせ，該当する英語動詞群を考察する。

人間にとって，最も分化し，発達している五感は，視覚であり，聴覚も，それに劣らず重要な位置を占めている。しかし，本稿の主旨に照らして見ると，その他の嗅・味・触の感覚も，より直接的で，重要となってくる。これら五感からの刺激は，精神活動に大いに影響し，反射的には，思考面よりも感情面に訴えかける可能性が大きい。

更に，その精神的変化は，言語行動として吐露される可能性があり，反射的には，前言語として表出するかもしれない。しかし，状況によって，その音声が押さえられたとしても，息使い，つまり呼吸に乱れが生じないだろうか。より強い感情では血圧，血行にまで影響が及び，ときには吐き気を催し，気を失うこともあるだろう。

肉体行動，それも直接的な，動物的な行動に走る可能性も考えられるが，程度や質によっては，表情や身振りとして表出しないだろうか。なかでも，言語同様に学習された表情や身振りは，押さえられ得るが，身体内変化が表情として出て来る場合は言うまでもなく，それに近い，より反射的な表情は押さえ切

Hosei University Repository

れない。

この様に，本稿では，まず『感覚』として≪五感≫と，それに刺激されて起きる精神的変化のうち≪喜怒哀楽≫を考える。次に，付随して『身体内変化』が起きるであろう，≪自律神経≫の司どる呼吸・消化・血行の他，≪休息≫についても言及する。更に，それぞれの精神的変化を表わす『表情』として，まず≪筋肉≫のレヴェルを，後で，最も集中する≪顔≫を考える。

感　　覚

人間の身体部位のうち，目・耳・鼻・舌・皮膚は五官と呼ばれ，それぞれ，視・聴・嗅・味・触の五感を司どる，と言われている。人間の場合，この順で鋭敏性を発達させており，特に，視・聴の感覚は，他の個人性に対して，社会性を有している様に思われる。

≪五　感≫　視覚は五感の中で突出しており，他の感覚の確認さえする。然るべき視力の目は，視界内を知覚し，一般的には SEE が適用されるが，厳密には，視線と焦点が合う部分に関してである。その能力を発揮して，理解する，確かめる意の他，その能力を享受して，見物する，会う，等の意も持つ。SEE 系の表現として，瞬間的に目に入る GLIMPSE や，気付く OBSERVE が挙げられる。ついでながら，READ は思考が絡む文字に関してである。

目が開いていれば，いつでも行なっていることではあるが，意図的に視線と焦点を合わせるのは LOOK である。LOOK 系の表現は，いくつも挙げられる[1]。チラッと一瞥するのは GLANCE で，凝視するのは STARE である。熟視とでも呼べる GAZE には観賞の意が加わるか。注視するのは VIEW で，見続けることにもなる。その際，動きを重視するのが WATCH で，虚心に観察するのは OBSERVE であろう。更に，良く見えないので，睨き込むのは PEER あるいは PEEP, PEEK である。

目は開けっ放し，というわけにはいかない。生理的に涙で潤っている必要がある。そのために，瞬きするのは BLINK で，同義として WINK も適用される。一瞬であれ，目を瞑ることで，見て見ぬ振りをする，更に，見逃す意も含まれる。OVERLOOK は，それを強調しているか。

目を瞑らなくても，目が見えない状況はあり得る。一般的に，視力を奪うのは BLIND であるが，一瞬，眩しい光などが，目を眩ませる場合もある。それ

Hosei University Repository

を強調するのが，驚かせる意を含む DAZZLE, DAZE である。挙句に，「めまい」まで起こさせるのが DIZZY である。ところで，涙などが目を翳ませる意の BLEAR は，対象物自身を霧などが霞ませる意も持ち，仲間として，より広い意を持つ BLUR, DIM が挙げられるか。ともあれ，目が捕えた対象物は，外見上，何かに見え，それにも LOOK が適用される。また，主観性を示す SEEM や，外観性を示す APPEAR も，同義である。

聴覚も視覚と共に重要である。目と違って耳は，いつも開放されていて，視線の様な指向性もなく，四方から，絶えず音を知覚する。HEAR が適用されるが，思考が絡む発話も対象となり，その能力を発揮して，伝え聞く，聞いてあげる意の他，その能力を享受して，鑑賞する意も持つ。聞く気がなくても聞こえて来て，漏れ聞くのは OVERHEAR である。

一方，意図的に，立ち聞き，盗み聞きするのは EAVESDROP である。一般的に，耳を傾けるのは LISTEN で，人の発する言葉やアドバイスなども対象となる。注意を払う意の ATTEND は，どちらかと言うと，目より耳に関してであり，耳に手を当てる仕草を思い浮かべるか。

ともあれ，耳を，指や掌で，塞ぐ間もあらばこそ，大音響が耳を聾するのは DEAFEN である。それが耳をジーンとさせ，耳鳴りまで起こさせると RING が適用されるが，事程左様に，対象となる音が，発話を含め，何かとして聞こえて来る，あるいは響く，ことにも，SOUND と共に適用される[2]。

嗅覚は，耳と同様に絶えず開放されている鼻が司どるが，吸気に伴なう感覚なので，知覚時間は，ほぼ半減するだろう。一般的には SMELL が適用されるが，SCENT と共に，その能力を発揮して，嗅ぎつけ，嗅ぎ出す意も持つ。犯罪や秘密などに対して，臭いの比喩が使われるので，それに関して，感付く意も含む。

一方，意図的に嗅ぐのも SMELL である。鼻をクンクンさせての SNIFF, SNUFF は，嗅ぐ意と共に，嗅ぎつける意も持つ。NOSE も同義であるが，鼻を押しつける意，を含む。後者を強調する NUZZLE にも，その可能性があるが，甘えている仕草であろうか。

対象物が匂うことにも SMELL は適用されるが，smelling salts から分かる様に，むしろ悪臭を暗示する。後者を強調するのが STINK, REEK で，それぞれ，周囲を，その匂いで一杯にする，一杯である意を含む。SCENT は香水などを付けること，そして，匂いで充満させること，更に，匂いがすること

Hosei University Repository

までも意味する。

味覚は嗅覚と異なり，快い感覚が，むしろ話題となる。感官は舌である，と言われるが，正確には，口腔内であり，嗅覚の鼻も関わる。口も開閉自在であるが，閉じているのが常態で，目とは知覚時間が逆転する。TASTE が適用されるが，その能力を発揮して，感じる，体験する意の他，その能力を享受して，RELISH, SAVOR と共に，料理等を賞味する意も持つ。

意図的に味をみることも TASTE であるが，結局，食べたり，飲んだりすることを意味する。明確に，試飲，試食する意は FORETASTE である。更に，対象物に関して，色々な味がすることにも TASTE は適用される。RELISH, SAVOR 更には SMACK も，ここに加えられ得るが，嗅覚の関わる，風味がする意，を含むことを記さざるを得ない。

触覚は皮膚が司どり，皮膚感覚とも呼ばれる。FEEL が適用されるが，より広い意を持ち，いわば「肌で感じる」意を含む。その能力を発揮して，感じる，気がする，などの意の他，その能力を享受して，感動する意も持つ。

一方，意図的に触覚を得ようと触れることにも FEEL は適用されるが，それを頼りに，何かを探す意も含む。それを強調する GROPE と共に，手探りで進むことも暗示する。ついでながら，一般的に，手足などが何かに触れるのは TOUCH である。ともあれ，対象物に関して，何らかの手触りがする，あるいは，何かの感触がある意にも FEEL は適用される。

ところで触覚には，具体的な物が，「具体的な触覚を引き起こす」意の表現が，いくつもあるので[3]，より一般的なものだけでも，記さざるを得ない。何かで「くすぐる」「痒がらせる」TICKLE は，その結果，触覚を得たどこかがムズムズするだけでなく，触覚を与えた物がムズムズする意をも持つ。一般的に，どこかが痒いのは ITCH である。一方，怪我や傷を負わせ，痛みを与える HURT は，どこかが痛む意も持つ。どこかが痛むにしても，継続的であり，疼くことでもあるのが ACHE である。

以上の五感に関して，知覚するのは PERCEIVE で，気付く，理解する，意を含む。SENSE も同義として挙げざるを得ない。神経を集中するのは CONCENTRATE で，それぞれの感覚を鋭くするのは SENSITIZE である。上手く知覚出来れば CATCH となり，失敗すれば MISS となる。無意識に頭脳を使うことを強調すれば CEREBRATE が適用される。

≪喜怒哀楽≫ この様にして得た刺激は，内的精神活動に，つまり，思考の

Hosei University Repository

世界にも，感情の世界にも影響を及ぼす[4]。それぞれの世界の詳細については，それぞれ別途に考えるとして，ここでは，後者に直結する「精神的変化をもたらす」意の一連の他動詞群の裏面について考える。

それらは使役の意を持つ，いわば他律詞でありながら，何故か[5]，一部は，自律詞としても機能するのである。そこで，自律詞としてのみ機能する表現があれば，その意義は大きい。果たして，いくつかあるので，それらしく並べて見よう。憤然と激怒するのは RAGE である。大いに恐れる DREAD は，FEAR と共に，心配する程までを意味する。驚嘆する MARVEL は，こちらも WONDER と共に，不思議に思う程までを意味する。一般的に，悲しむのは SORROW で，苦しむのは SUFFER である。後悔する REPENT や，絶望する DESPAIR の前に，優しくなる RELENT でありたい。

ついでながら，両機能を持つ表現も，同様に並べておく。イライラ怒るのは FRET である。悲しくなる GRIEVE, SADDEN には，苦しみ悶える AGONIZE に近い，場合もあるか。興奮する THRILL は，大喜びする REJOICE や，大いに楽しむ DELIGHT につながらないか。寛ろぐ RELAX も必要で，その後，陽気になる LIVEN が続く。

ところで，液体や気体を連想させる動詞群の一部が，同様な自律詞として，稀には，他律詞としても，機能するので，続けて記しておこう[6]。怒りなどが爆発しそうなのが SIMMER で，爆発して激怒するのが BOIL で，STEAM は，カーッと，より激しいか。STEW はヤキモキすることである。怒りや不満でモヤモヤするのは SMOLDER で，KINDLE は，何らかの感情に火がついて興奮することで，特に，怒りで腹立つならば FUME である。活気づき陽気になるならば EFFERVESCE であろう。これらは，これから記すことになる身体内変化は元より，付随して起きるであろう言語行動や肉体行動をも暗示していないだろうか。

身体内変化

精神的変化は言語行動として，それも，より直接的な言葉で吐露される可能性があるが，反射的には，言葉にならない音声，つまり前言語として表出しないだろうか。それらの詳細は別途に考えるとして[7]，ここでは，その際に起きる身体内変化について考察する。

Hosei University Repository

≪**自律神経**≫　その変化は，大凡，自律神経が平生時を通して司どる生理機能の一部である。そこで，具体的変化の意義を明らかにすべく，常態にも言及せざるを得ない。

今，話題にしたばかりの直接的な言葉や，言葉にならない音声に付随する息使い，つまり呼吸を，まずは，問題にして良かろう。一般的に，呼吸するのは BREATHE であるが，平生時は無意識なので，一度，意識すると，一休みする意となる。息を吸う INHALE, -SPIRE と，息を出す EXPIRE, -HALE の連続であるが，絶えずスムーズに行くとは限らない[8]。鼻がムズムズして嚏をするのは SNEEZE で，鼻水を垂らして啜るのは SNIVEL である。詰まった鼻をフンと吹くのは SNORT で，そのまま，喘ぐ様に，鼻息荒く，息をすることも意味する。

驚きや怒りなどで，ハッと息を飲むのは GASP で，挙句に，酸欠で，ハァハァ喘ぐ意も含まれる。後者を強調するのは，動悸の意もある PANT である。逆に，落胆や安堵で，大きく溜息をつくのは SIGH で，退屈や疲労で，大口を開けて欠伸をするのは YAWN である。大口を強調すると GAPE も適用され得る。ついでながら，常態でない息使いは音声を伴ないがちで，前言語としても扱かわれ得ることを付記しておこう[9]。

息を止めることで窒息させる意の SMOTHER は，出ようとする欠伸を殺すことも含む。STIFLE も同義と言える。息を詰まらせて噎せる意までも持つのが SUFFOCATE, CHOKE である。STRANGLE は喉を絞めることである。どれも，欠伸の他，叫び声や感情までも殺す意を持つ。

息を詰まらせて噎せる前に，喉を気にして，咳払いをするのは HEM であるが，口籠る意も含む。ついでながら HEM and HAW の HAW は，アー，ウー，エー，など，曖昧な音声を発して口籠ることである。一般的に，咳をするのは COUGH で，咳払いは元より，咳をして痰などを吐き出すことも意味する。EXPECTORATE は後者を強調している。SPUTTER は，喋ったり，咳込んで，唾や食物を口の中から飛ばすことであり，SPIT は，意図的に，唾などを口から出すことである。

度を越して興奮，緊張すると，唾が分泌せず，唾も吐けない。喉が渇くのは THIRST であるが，唾は唾液のことであり，特に，空腹の時に，食欲がそそられて，多く分泌する。空腹になるのは HUNGER で，度を越して，飢える意もあるが，STARVE は，それを強調する。渇きを消すのは QUENCH で，

Hosei University Repository

渇きに空腹も含めて癒すのは SLAKE である。

具体的には，飲物を飲み，食物を食べることで，それぞれ，DRINK, EAT が適用されるが，摂取するというなら INGEST である。賞味することは，味覚に関する折，既述した[10]。消化するのは DIGEST で，吸収するまでも含めると ASSIMILATE である。上述した様に，興奮していると充分に唾液は出ないし，胃も活動しないから消化には良くない。

ところで，視・聴・嗅の感覚だけでも，食欲は，そそられ，唾液が，多量に分泌する。SALIVATE が適用されるが，SLAVER, SLOBBER と，流出量が多くなるだろうか。当然，涎を垂らす意を持つ。その結果，飲ませ過ぎたり，食べさせ過ぎると SURFEIT である。満腹になり，ゲップを出すのは BELCH, BURP で，ERUCT(ATE) も加えておこう[11]。

その勢いによっては，胃の中の物を戻す。嘔吐するのはVOMIT, SPEW で，上げる意の HEAVE も適用される。吐かなくても，食べ過ぎると吐き気を催す。否，腹の調子には関係なく，悪臭，乗物酔い，不快な感情等は，気持を悪くさせる。一般的には SICKEN が適用されるが，ムカムカするのは，NAUSEATE, RETCH である。

然るべき時間が過ぎると，排泄が促される。小には URINATE, PISS が，大には DEFECATE が適用されるか。排出ということでは EXCRETE が，排泄ということでは，空にする意の VOID, EVACUATE が適用される。空に出来ないと，便秘させて CONSTIPATE である。下剤を使うのは PURGE で，空ではなく，清にすることを意味する。

五感と同様に，外なるものを内に入れることで，呼吸と消化を先に言及したが，内なるものを外に出す新陳代謝までを考慮すると，血液の果たす役割は大きい。更に，精神的変化が身体内変化として，もし現われるならば，僅かであれ，まずは血圧，血行に，ではないだろうか[12]。

鼻や口から入った酸素や栄養分は，血液が身体内を循環することで，駆け巡る。CIRCULATE が適用され，汚れた血に，酸素を加え，動脈血にするのは AERATE で，静脈血の流れが滞って鬱血する，あるいは，動脈において充血するのは CONGEST である。

起点となる心臓の鼓動は，平生では聞こえないが，強調すると POUND で，BEAT ならば動悸までも暗示するか。PULSATE, PALPITATE なら，ドクドク脈打ち，ときに，身体が震えることも暗示する。更に，ズキンズキン高な

Hosei University Repository

るのは THROB である。ところで，リズミカルに脈打つのは PULSE であろう。VIBRATE は感動して，心が震える意であると考えた方が良いか。

ときに，激しい鼓動と共に顔が紅潮する。恥ずかしくて赤面するのは BLUSH である。FLUSH も紅潮する意であるが，むしろ怒って，を暗示するか。後者を強調するのは FLAME である。とにかく興奮して，火照って紅潮するのは GLOW である。何であれ，赤くなる意の REDDEN も，これらの意を持つ。一方，興奮して顔面蒼白になり，PALE, BLANCH が適用されることも記さざるを得ない。

ときに，血が頭に登って鼻血を出すこともあるだろう。一般的に，怪我などを含め，血が出るのは BLEED である。また，外気温に関係なく，紅潮した肌は汗を掻く。当然，冷や汗も含む。一般的には SWEAT が適用されるが，PERSPIRE も挙げておこう。汗だくになる SWELTER は，むしろ，うだる暑さを連想させるか。

≪休　息≫　酸欠のせいか，空腹のせいか，それとも，血が逆流してか，気を失うことがある。「めまい」がする意を含めて FAINT が適用される[13]。むしろ，ウットリして気が遠くなるのは SWOON である。一方，気絶させるのは STUN で，卒倒させるのは KEEL である。

気を失うと神経は鈍り，それ以上の刺激を受けなくて済む。つまり，生体維持のための究極の生理機能であろうか。一般的に，鈍くするのは DULL である。寒さなどで感覚を失わせ，痺れさせるのは (BE)NUMB で，酒や麻薬などが，知覚を麻痺させるのは STUPEFY である。一時的にしろ，良ろしくない状況が浮かんで来る。しかし，催眠術をかける HYPNOTIZE は，魅了する意を持つ程に，様々な効用が指摘される。

目を閉じて，まず，視覚を休めることから始まる睡眠の重要性が理解されないだろうか。精神と肉体は，相互に影響し合って，日頃の度重なる心身の疲労やストレスは，自律神経失調症や不眠症にまで至る。元気をなくし窶れるのは LANGUISH である。ついには，体力，気力が萎えて，崩れ落ちるのが COLLAPSE で，卒倒の意を含む。その前に，緊張を緩め，寛ぎ，自ら休ませ，休む必要がある。それぞれ RELAX, REST が適用される[14]。幼児ならば，宥めたり，すかしたりして，寝つかせる LULL も可能であろう。

休むべく，眠るのは SLEEP である。同義の SLUMBER は，スヤスヤと眠る様子を連想させるか。昼寝など，転た寝するのは NAP である。居眠りや転

Hosei University Repository

た寝で目蕩むのはSNOOZE, DROWSE, DOZEであろうか。何時であれ，眠気がさしてコックリするのはNODで，それで目が覚めることもあるが，繰り返し，舟を漕ぎ，ウトウトすることもある。それ自身，気持良く，目覚めた後も爽快であろう。ついでながら，鼾を掻くのはSNOREで，眠り惚ける意もある。更に，夢を見るのはDREAMであるが，これもまた，精神生理的には重要な機能である，と言われている。

表　　情

内なる感情を，外に表わし出すのが，文字通り，表情である。特に強い感情は，特徴ある表情を呈するので，ハッキリと特定することが出来る。より反射的，生理的なものから，言語同様に形式化され，学習されたものまで，広範に及ぶことを付け加えておこう。

≪筋　肉≫　精神的変化は，言語行動だけでなく，肉体行動としても吐露され得る。それも，より直接的な，反射的な行動であろう。その詳細については別途に考えるとして[15]，ここでは，上述の通り，前肉体行動とも呼ばれ得る，表情には，言及せざるを得ない。精神的変化は，自律神経の司どる不随意筋だけでなく，身体を支える随意筋にまで，影響を及ぼすというのだろうか。

目や血管などの膨脹は，想定される円形が拡大するとしてDILATEが，更にDISTENDが適用される。表面的には，隆起し，脹れ上がるのでSWELL, BULGEであろうか。ついでながら，腹など，張り出し過ぎて，ダブつくのはBLOATである。これら三様に対立して，それぞれ，血管や筋肉が収縮するのはCONSTRICTで，隆起が収まって，縮小するのはSHRINKで，縮んで，萎びるのはSHRIVELである。

立体の見方は他にもある。肺など，球体が脹らむのはINFLATEで，萎むのはDEFLATEである。一般的に，立体が大きくなるのはEXPANDで，小さくなるのはCONTRACTであり，熱による物体の膨脹と収縮も意味する。当然，これらは，線的な，あるいは面的な，拡大・縮小も包摂するが，特に，拡大，つまり，伸ばすことを強調する表現があるので記しておこう。

線的に，手足などを伸ばすのはREACHであるが，EXTENDは，面的に伸ばすことも含む。更に，線的に，面的に，伸ばすだけでなく，ピンと張るのがSTRETCHであり，他方，面的に見て，手足など，大の字になって，ダラ

Hosei University Repository

しなく伸ばすのが SPRAWL である。

以上から，暗示される緊張と弛緩を見逃すわけにはいかない。それらを強調する表現も，また，ある。筋肉や神経を，緊張させるのが TENSE で，緩めてやるのが既出の RELAX である。緊張の連続は，身体や筋肉を強張らせることになり STIFFEN が適用されるか。それを「ほぐす」のは，ウォーミングアップの意もある LOOSEN である。そのためには，身体全体を動かさざるを得ない。

関節を曲げるのは FLEX で，伸ばすのは，既出の STRETCH であるが，それに加えて，身体を前後左右に撓ませることを含むのが BEND で，元に戻すのは UNBEND である。その際に，筋肉を張るのが TIGHTEN であり，緩めるのが SLACK(EN) である。この様に，身体を「ほぐす」ことで，しなやかにするのは LIMBER であり，鍛えるのは HARDEN である。以下，健全な肉体の，身体の表情を考えて見よう[16]。

筋肉は動く様に出来ていて，動かさないでいるとストレスが溜まるので，既述した視線然り，僅かでも動かさずにはいられない。落着きがなく，ソワソワ，モジモジするのは FIDGET で，子供などが退屈して，モゾモゾ，クネクネするのは，W(R)IGGLE, SQUIRM である。

一方，虚脱感からか，力が入らず，ヨロヨロするのは TOTTER, SHAMBLE であろう。WAVER も，揺れることを強調するが，手や声が震えること，も暗示する。その上 WOBBLE は，膝がガクガク，心の動揺が伝わって来るようだ。更に，口籠ったり，吃ることまでも意味する FALTER は，様子が変である。加えて STUMBLE は，躓く意も含む。

力が入っても，声を含め，身体が震えることを強調する表現もある。意図的に揺り動かすことも含めると SHAKE を挙げざるを得ないだろうが，ここでは TREMBLE が，最も一般的で，寒さを含め，恐怖や怒りなどで身震いし，手足が震えることを意味する。瞬間的にゾクッとするのは SHIVER であり，特に，弱い震動を意味する。激しい身震いは SHUDDER であり，QUAKE は大きな身震いからの揺れを連想させる。

力を入れて，押さえ様とすればする程，余計に震えてしまう筋肉は，痙攣を起こすこともある。目蓋や口元などがピクピクするのは TWITCH である。急に，腕などがビクッとなるのは JERK であるが，一般的な痙攣にも適用される。CONVULSE は，激情が顔や身体を引攣らせたり，苦痛や大笑いが身

Hosei University Repository

悶えさせる意までも含む。苦痛になる程に痙攣させる CRAMP は，胃痙攣や腓返り，を連想させる。ついでながら，吃逆をするのは HICCUP, -COUGH で，横隔膜の痙攣による。

≪顔≫ 表情は顔に集中して現われるが，瞬間的な場合も多く，見逃すこともある。取り敢えず，前言語であるとも指摘され得る「泣き笑い」について考えてみよう。

笑い声を出して笑うのは LAUGH で，それを押さえて，クスクス笑うのが CHUCKLE である。一方，笑い声なしで微笑む SMILE は，苦笑いでもあり得る。同様に，歯を剝き出して笑うのは GRIN であるが，これも，苦痛や怒りを表わす場合があり得る。尤も，後者の場合は，目付きが違うか。笑うべき感情で，ときには泣くこともある。泣き声を出して泣くのは CRY で，喧び泣き，啜り泣くのは SOB である。WEEP は泣き声よりも涙を流すことを強調している[17]。

そんな，溢れ出そうな涙を押さえ様と，目を腰叩かせることもある。逆に，興奮して唇が乾き，吃る人が居る様に，目が乾きそうなのか，忙しなく瞬く人もいる。否，驚いて，目をパチクリさせているのであろうか。どれにも既出の BLINK, WINK が適用され得る。

驚くと，逆に，目を見開く場合もある。目を見張るのは GOGGLE で，目を対象に ROLL が適用される程に，目を回してギョロつかせることであろう。口まで開けて，ポカンと見蕩れるのは GAWK である。口を開けていることを強調して，既出の GAPE も適用される。

一方，目を見張って，ギラギラと睨み付けるのは GLARE であり，そのことで，相手の目を逸らさせるのは OUTFACE である。相手の目は，ガラスを嵌めた様にドンヨリ，目が対象となり GLAZE が適用される。その様子に対して，否，一般的に，満足気に，あるいは，ほくそ笑み，眺めるのは GLOAT である。前述の笑い顔につながって行く。

笑い顔には細くなった目，が付き物であるが，一般的に，目を細めて見るのは，斜視の意もある SQUINT で，横目で，チラッと見ることも含む。後者を強調している LEER は，意地悪そうにも見えるが，色目を使う流し目でもあり得る。そんな風に，物欲し気に見るのは OGLE であろう。

目を細めて緊張させると，眉を顰めることになる。そんな顔をして睨むのは (G)LOWER, SCOWL であろうか[18]。眩しくても，顰めっ面にはなる。これ

Hosei University Repository

らは，不快感を強調する FROWN に代表される。むしろ困惑して，唇なども含めて顔を歪めるのは GRIMACE であろう。一般的には，捩る意の SCREW, CONTORT も，顔を対象に絮める意を持つ。

同様にして，皺を寄せたり，襞を付ける意の PUCKER は，眉を対象に，絮める意の他，唇を対象に窄め，突出す意も持つ。開閉自在な蝦蟇口を連想させる PURSE も同義である。特に，口元を対象にする POUT は，不機嫌で，脹れっ面をする意で，その上，拗ねて，ムッつりすれば SULK である。

而して，顔や目が，晴れ晴れするのは LIGHT で，元気を取戻し，頭や耳をツンと立てるのは PERK で，特に，耳を立てる PRICK は，耳を傾ける意である。鼻を鳴らす SNORT や，口から唾を吐く SPIT は，軽蔑や憤慨を意味し，舌嘗りする SMACK は，舌打ちの意もある。怒って，毛を逆立てるのは BRISTLE で，威張って胸を脹らますのは PUFF で，踏反り返って歩くのは SWAGGER である。肩を竦めるのは SHRUG で，指や手で手招きの合図をするのは BECKON であるが，目配せする WINK の場合もあるか。

最後に，顔だけでなく，他の身体部位に関しても，より具体的，かつ説明的な表現を，いくつか，勝手に挙げてみた。表情だけでも然り，身振りも含まれるので，より反射的，生理的なものから，形式化されたものまでも，見て取れる。ついでながら，身振りや手真似をするのは GESTURE, GESTICULATE である。

犬や猫などの動物からの比喩表現ではないのか，と思わせるものや，また，その事とも関連するが，精神的変化なのか，表情なのか，どちらとも取れるものもある。更に，既述した様に，前言語を暗示するものなどを含めて，別の視点からの，更なる考察が期待される。

≪注≫

（1） LOOK 系だけでなく，SEE 系に関しても「LOOK と SEE を焦点とした語彙場の意味と分析」に，より詳しい記述が見つかる。

（2） 具体的な音に関しては「音を連想させる英語動詞群の意味分析」が詳しく記述している。

（3） いくつか記すと，ムズムズする CRAWL, CREEP, チクチクする PRICK, PRICKLE, ズキズキする STAB, STING, 更に，疼く TWINGE, SMART, ヒリヒリ火照る CHAFE, BURN などである。

（4） 思考の世界は「KNOW 及び THINK に集束する意味場の構造分析」において，一方，感情の世界は「精神的変化を連想させる英語他動詞群の意味分析」と「好意的及び非好意的関係・反応を連想させる英語動詞群の意味分析」にお

Hosei University Repository

いて，それぞれ，かいま見ることが出来る。

（5） 本稿の枠外のことではあるが，歴史的に解明されるのではないだろうか。

（6） それらの表現の本来の位置づけは「液体及び気体から連想される英語動詞群の意味分析」を見ると良く分かるか。特に，前4者は「CULINARY DOMAIN の構造分析」を見ると良い。

（7） 言語行動の一部と，前言語に関しては「SPEAK と TALK を代表とする意味場の分析」が詳しい。

（8） 僅かな量であれ，鼻によらない皮膚呼吸もあることは周知である。

（9） 喘ぎや溜息は，注（7）の「SPEAK と TALK を」の≪CRY・CALL≫で，前言語として扱われている。ついでながら，本稿の『身体内変化』で言及されている生理的な音は，注（2）の「音を連想させる」の≪生理的≫で，まとめられている。

(10) その際の咀嚼に関しては「口・手・足から連想される英語動詞群の意味分析」の『口』が詳しく記述している。

(11) ついでながら，オナラをするのは FART であるが，それよりも，ゲップをする方が下品である，とする文化もある。

(12) 本格的なウソ発見機の実体と，その有効性については，余り，知られていないが，脈博は，その記録の対象になるだろう。

(13) 「めまい」は既に，≪五感≫の視覚に関する記述で話題になっている。ついでながら，「めまい」がしてフラフラするのは REEL である。一方，気を失うことは，人間にとっての hibernation であろうか。

(14) 類似した表現が，注（4）の「精神的変化を」の『快』に多く見出される。

(15) 肉体行動の一部は，注(10)の「口・手・足から」の他，「DO に誘引される英語動詞群の意味分析」「動くことを連想させる英語動詞群の意味分析」「動かすこと及び物理的変化を連想させる英語動詞群の意味分析」においても，かいま見て取れる。

(16) これらは，注(10)の「口・手・足から」の『足』と，同じく注(10)の「動くことを」に，重複する部分が見つかる。

(17) 「泣き笑い」は，注（7）の「SPEAK と TALK を」の≪CRY・LAUGH≫において，『前言語』として，より詳しく記述されている。ついでながら，溢れる涙は生理的なもの，『身体内変化』で扱うと，どういうことになるのだろうか。

(18) 以上の目に関する表情は，殆ど，注（1）の「LOOK と SEE を」でも，要約されてはいるが，触れられている。